臨床雑誌「整形外科」第59巻第12号 2008年11月1日発行(毎月1回1日発行)
1959年2月12日第3種郵便物認可
ISSN 0030-5901 Seikei Geka

ORTHOPEDIC SURGERY

臨床雑誌 整形外科

Vol. 59
No. 12
2008-11

論説
橈骨遠位端骨折に対するプレートおよびロッキングピン設置位置の検討
——術後早期運動療法と骨粗鬆症による術後矯正損失に着目して……善家雄吉ほか…1411

経験と考察
大腿骨ステム周辺骨折の治療経験……熊丸浩仁ほか…1419
ステム付きコンポーネントを使用した人工膝関節再置換術の治療成績……渡邊裕規ほか…1425
クリニックにおける関節リウマチに対するエタネルセプトの長期成績とリスク管理……生野英祐ほか…1429

臨床室
前胸部腫瘤形成を主訴とした前縦隔血管腫の1例……山下英樹ほか…1437
Mycobacterium shinshuense により生じたBuruli潰瘍に類似した難治性肘頭部潰瘍の1例……今田英明ほか…1440
コンストレインドライナーの臼蓋セメント固定により反復性人工股関節脱臼に手術的治療を行った2例……増井徹男ほか…1447
サッカーによる大腿骨遠位骨端線離開の1例……西村和史ほか…1452
膝内側側副靱帯大腿骨付着部裂離骨折に対しpull-out buttonを用いて骨接合術を行った1例……花田　充ほか…1456
有痛性中足骨骨頭部遺残変形の3例……金澤和貴ほか…1459

卒後研修講座
大腿骨頭壊死の病態と治療……藤岡幹浩ほか…1471

問題点の検討
橈骨末端用掌側プレートの不具合例……安田匡孝ほか…1481

今日の問題点
低侵襲人工股関節全置換術と早期退院プログラムによる医療経済効果と問題点……仲宗根　哲ほか…1485

整形手術手技
鎖骨遠位端骨折に対するサソリ型プレートの治療経験……西塚隆伸ほか…1491

連載
整形外科医が知っておくべき骨・軟部腫瘍の組織像
成人型線維肉腫……小田義直…1464

連載
いま基礎研究がおもしろい——整形外科医のラボ日記……西田圭一郎…1466

連載
専門医試験をめざす症例問題トレーニング
肩甲帯・肩・肘関節疾患……齋藤育雄ほか…1496
外傷性疾患(スポーツ障害を含む)……山中一良…1502

連載
最新原著レビュー
圧迫性頚髄症におけるMRI T2強調画像での輝度変化分類
——手術成績の予測因子として……湯川泰紹…1509

誌説
患者とのリスクコミュニケーション…大川　淳…1418

私論
医師の専門化と鏡視下掻爬術……小林正明…1436

整形トピックス
脊髄症における下肢運動機能の新たな評価法
——3点ステップテスト
(triangle step test)……三原久範ほか…1446

X線診断Q&A……荻久保　修…1469

Vocabulary
シメチジン……佐藤栄一ほか…1480

喫茶ロビー
この頃思うこと……茂手木三男…1490

海外学会の記
第2回Spineweek……川口善治…1513

学会を聞く
第51回日本手の外科学会……柿木良介…1516
第41回日本整形外科学会
骨・軟部腫瘍学術集会……西田佳弘…1519

書評
『足のクリニックII』……山本晴康…1518

整形小トラの巻
骨盤(腸骨)採骨のコツ……1435

診療余卓
ドラマ"ER"から学ぶ医学①——交通事故で大量出血…1458/医学辞書を公開しました…1484

お知らせ
山の手通八木病院整形外科医師募集…1417/三朝温泉病院整形外科医師募集…1424/第10回日仏整形外科合同会議…1445/第14回スポーツ傷害フォーラム…1455/第20回中之島リウマチセミナー…1489/第46回乳児股関節エコーセミナー…1508/転倒予防医学研究会第8回転倒予防指導者養成講座…1517/第38回日本脊椎脊髄病学会…1521

Information(編集室から)……1439

別冊整形外科No. 56
「関節周辺骨折——最近の診断・治療」要旨募集…1495

学会告知板……1522/寄稿のさだめ……1523

編集後記……1524

南江堂

B O O K R E V I E W

井口 傑 著

足のクリニックII

A5判・206頁　定価（4,500円＋税）　2008年・南江堂

畏友井口傑先生が慶應義塾大学からの退職を機に，40年にわたる手術生活に決別し，これまでを振り返り本書を上梓された．本書は2004年に出版された『足のクリニック――教科書に書けなかった診療のコツ』の続編である．この本が好評で，それが今回の本書の出版につながったのではないかと推察する．

本書の構成は，序章，第Ⅰ章「こう書いてみたかった外反母趾手術」，第Ⅱ章「なぜ，手術は失敗するのか？」，第Ⅲ章「外反母趾のなぜ――病因から手術まで」，第Ⅳ章「人間とは直立二足歩行する動物」とコラムからなる．

第Ⅰ章が本書のハイライトである．著者は，この章のはじめに外反母趾には病態生理から手術の原理まで足の外科のすべてが凝集され，外反母趾の手術をとおして手術の原理の理解からそこで必要となる細かいテクニック，そして新しい術式への開発へすすむ道を描きたいと述べ，「手術書に書けなかったこと」をこの章で存分に書いている．現代は動画の時代であり，動画をみて手術の勉強をすることが多くなっているが，細かなことやポイントは動画でもわからないことがある．この章では著者の筆力と図でたいへんわかりやすく，詳細に著者の得意とするMann変法（POMO法）とDLMO法を記載している．その中で局所麻酔，メス，ラスパの扱い方，皮下の剝離，神経の確保，関節包の縫縮，骨切り，Kirschner鋼線固定，ワイヤー締結のそれぞれのコツをていねいに説明している．このような点は現在手に入る手術書ではお目にかからないもので，若い先生方には参考になるのではないかと思う．DLMO法については，骨切り部の固定性にヨーロッパとアメリカの医師の間で議論があるところであるが，著者の自験例から，ずれないで骨癒合する理由を屈筋腱の緊張と術後靴のゴム床の反発力の関係，飛行機の着陸にたとえて説明している．説得力のある説明であるので，後継者と協力して学術雑誌に発表していただき，DLMO法における骨切り部の固定性についての論争を決着させていただきたい．

第Ⅱ章は，医療訴訟が盛んになってきた現代において書きにくい手術の失敗を取り上げている．著者が「はじめに」に引用しているVirchowの“屍の向こうに明日がある”の言葉どおり，著者は失敗の1例1例を真摯に受け止め，反省し，考え，努力し，今日にいたった過程をこの章から読み取ることができる．手術の極意として，「患者を選ぶ」，「やってはいけない手術」，「難渋せずあきらめる勇気」，「迷うのが手術のコツ」，「手術は患者のためならず」を取り上げてそれぞれを説明しているが，筆者の経験からもなるほどと同感する．「手術は患者のためならず」の項で，著者の小学校6年生の患者さんが，著者と入院中友達になった患者さんや周囲の友達について書いた作文「私に勇気をくれた人たちへ」を載せている．これを読むとたしかに「手術は患者のためならず」で，著者が挫けそうになるとこの作文を読んで頑張ったということがよく理解できる．この作文は著者の宝物である．

第Ⅲ章では，これまで教科書に書かれていない病因を取り上げている．外反母趾の病因をベクトルを使用して説明している点，片側性外反母趾の存在とその成因について説明している点が興味深い．

第Ⅳ章では，重力という視点に立って立位，歩行，足アーチを論じ，これまで論じられることが少なかった足の裏の脂肪について詳細に解説している．

コラムとしては，足に合う靴，外反母趾用の靴，繊細かつ鋭敏な足の神経，足のコンパートメント，第3の心臓などが興味深い．

本書は，足の外科に興味を抱く整形外科医のみならず，整形外科学の常識を高めるという点から，整形外科研修医・専門医，プライマリケアを行う医師，理学療法士，シューフィッターの方々に，自信をもっておすすめしたい一冊である．

（愛媛大学整形外科教授・山本晴康）